

サトウタツヤ（立命館大学教授）

司会 終了の時刻が迫ってまいりました。最後のクロージング・リマークスを本学の心理学の教授であるサトウタツヤ先生にお願いをして、締めとさせていただきます。

サトウ ただいまご紹介にあずかりましたサトウでございます。今日は皆様、ありがとうございました。最後ですね、クロージングということでご挨拶をさせていただきます。今日は朝から8時間、このひとつのテーマについてご賛同いただきまして、どうもありがとうございました。海外の先生方は日本人はワークホリックで困ると驚いていらっしゃるかもしれませんが、考えられる限り、最有力な先生方、海外からの先生方、弁護士の先生方をお招きすることができて、我々としては喜んでおりますし、また誇りとするところであります。共催関係、後援のみなさまにもご協力をいただきまして、このような会を持てましたことも喜びであり、誇りとするところであります。議論の内容についてまとめることはしませんが、いくつか話をさせていただきますと、今日は記録化のお話だったんですが、エンコーディング、記録するということはエンコーディングなんですが、これを読み解く、ディコーディングが大事なんだということがひとつ明らかになったことだと思います。そういうところにも議論を発展させていただければと思います。また日本においては裁判員裁判に限られるということでしたが、先ほど浜田教授が夢見が悪いということで警察官に講義されているということでしたが、まさに先ほど本学1年生の方が質問されていたように、彼女が20歳で裁判員になったとして、17年後、40年後に冤罪がわかるということが起きるかもしれないわけです。我々市民社会における裁判のあり方を考える上でも、記録化の問題、可視化されたということが終わりではなくて、まさに始まりで、エンコーディングの問題、ディコーディングの問題を考えていかなければいけないと思います。また、それを支えている捜査文化というんですかね、23日間という長い時間拘留するというところについても考えてい

かなければいけないと思います。ちょっと外国の方に伝わるかどうかかわからないんですが、私があるときに23日間、拘留されるとお話したところ、まず23時間か、それは長いという風に言われた。その次にIs it legal? つまり日本の司法システムがリーガル（合法）か？と聞かれたということで大変驚いたという記憶があるんですが、そういうようなことも含めて考えていかなければいけないと思った次第です。もうひとつ、そのジャスティスシステム（司法制度）はジャスティス（公正・正義）なのかということも言われたことがあります。日本のジャスティスのシステム、リーガルのシステムを世界との関係で考えていかなければいけないという風に思います。

ここでちょっと自分自身のことにも触れると、振り返らせていただきたいんですが、私が法と心理の世界に足を踏み入れたというか、足を踏み入れさせられたのは、私が福島大学に赴任した1994年のことですので、実に20年前のことです。その時浜田先生はフロントランナーとして、その背中を見ながら私たちも一生懸命やっていて、この20年後にこのような大きな会を持てたということは、私自身も感慨深く思っているところであります。しかし、ただただ道半ばだなと思っておりまして、ここにおられる皆様とさらに研究、あるいは実践を積み重ねていきたいと思っているところであります。実は立命館大学は来年度、大阪に新しいキャンパスを作ることになっています。最初に講演をした稲葉教授、政策科学部の教授ですが、彼は2015年は大阪で教鞭を取ることにしています。そして来年度、その大阪の地でパンパシフィックの法心理学会というものを開きたいと思っています。法と心理というのはそれ自体がトランスディスプリナリー（学融）な領域であります。トランスというのを融合の融と訳そうという運動を私はしているんですが、インターではなくて、トランス、2つの法と心理が融合していく、国と国の知識が融合してくというようなことを2015年度、大阪の地で始めたいと思っていますので、ここにいらっしゃる皆様と大阪で再会できるのを楽しみにしてまいりたいと思っております。今日は8時間という長きにわたってシンポジウムが続けられたのですが、この企画を立てられたのは元立命館大学、現成城大学の指宿教授でありまして、これだけ有力な先生方、弁護士の先生方をお招き出来たのは指宿先生の力だと深く感謝しております。また進行については各部の先生方が実に手際よく時間をキー

ブするというのをやっていただきまして、このように長い時間ですが、時間通りに進行出来たと感謝しております。ここに最後ではありますが、感謝申し上げたいと思います。よろしければ拍手をお願いします。私が締めさせていただきますが、以上を持ちまして今日のシンポジウム、日本の言い方ではお開きというんですが、閉じるのではなく、お開き、未来に向かって開くという意味ですが、おしまいにさせていただきます。参加している私たち自身、そして海外から来ていただいた先生方、登壇していただいた先生方に感謝を申し上げて、拍手でおしまいしたいと思います。どうもありがとうございました。